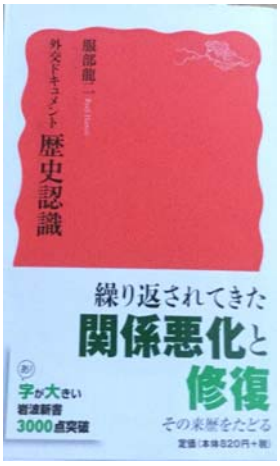
『外交ドキュメント歴史認識』を読む

表題と写真は、日本外交史・東アジア国際政治史の服部龍二さんの近著である。歴史認識をめぐり、安倍政権のもとで中国・韓国との摩擦が激しさを増している。その背景と歴史経過に関心をもち、本書を手にした。



著者によれば、本書の主たる目的は批評や提言ではなく、日本外交の視点から政策過程を分析することにある。諸外国との関係悪化だけでなく、修復の局面にも紙幅を割く。筆者が断を下すというよりも、読者のために材料を整理して提供したい。何度でも再燃しうる歴史問題を論じるうえで、そのことは基礎的な作業となるであろう。本書をタイトルのように題した理由とする。

本書構成は次のようである。序章 東京裁判から日韓・日中国交正常化まで、1 章 歴史教科書問題と「相互信頼」、2 章 靖国神社公式参拝、3 章 従軍慰安婦問題、4 章 村山談話、5 章 戦争の世紀を越えて、終章 歴史問題に出口はあるか

とりわけ興味深かったのは、「談話」策定をめぐる政策決定過程だ。一つは宮澤内閣時代の談話である。宮澤首相は最初の外遊先に韓国を選んだ。日本の首相として初の韓国国会演説は、植民地支配と慰安婦への謝罪となった。その後、加藤官房長官と河野官房長官の談話が出される。加藤談話は「政府の関与」を認め、「衷心よりお詫びと反省の気持ちを申し上げ」るとともに、善後策を検討するとした。もう一つは、1995 年夏の戦後 50 年の村山談話だ。8 月 15 日の閣議決定に至るドキュメントが興味深い。「村山談話は、いくつもの内閣を経て 20 年も継承されてきた。日本政治の共通言語になってきたといえ、対外関係における言葉の重みを政策に活かしたまれな事例であった。」

あとがきも紹介しておきたい。2015 年は戦後 70 年であるとともに、中国にとっては抗日戦争勝利 70 周年であり、韓国にとっては光復 70 周年、対日国交正常化 50 周年ともなる。歴史問題で最も回避すべきは、国の内外で感情の応酬になることであろう。

複雑な事象が単純化されると、国論が「保守」「反日」に二分されているかのような感覚に陥りやすい。そのような観念が定着すれば、慎重な者ほどレッテルを恐れ、社会的言説を控えるだろう。二分法は便利だが、不毛でもある。国を憂えることは、自国の歩みを問い直すことと矛盾するものではない。過去を顧みることは、関係国の一方的な主張に同化することとは異なる。あらゆる国の過去には、よき伝統とともに反省すべきところもある。国の将来を真剣に考えればこそ、過去に学びながら未来を見据えるのは自然なことであろう。

(2015 年 3 月 21 日)